

令和3年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月3日実施)	総合評価(3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	○自立と社会参加に向けた一貫性のある教育課程を編成し、学習指導を行う。	①子どもたちの「わかった・できた」をより多く引き出すために、ねらいを明確にした授業実践をし、わかりやすく評価することを旨とする。 ②ライフキャリア教育の視点をより強く意識し児童生徒の実態に合った教育課程の編成を行う。	①「学習のねらい」の示し方や、授業後の「評価」方法について、学部研究を通して検討していく。 キャリアアップ班が中心となり、年間計画の中でお互いの授業を見合う機会を数多く設定し、教員同士学び合う中で、学校全体の授業力向上につなげる。 ICT機器の活用を促進する。 ②引き続き学習会や校内研究を通して新学習指導要領に対する理解を深めるとともに、総括連絡会や教務班会等で横断的な議論を重ね、より実態に合った教育課程の編成につなげる。	①子どもたちの「わかった・できた」をより多く引き出すために、ねらいを明確にした授業実践をし、わかりやすく評価することができたか。 ②学校全体としてライフキャリア教育の視点をより強く意識し、児童生徒の実態に合った教育課程を編成できたか。	①ねらいの視覚提示物を用意することで授業の始めや途中場面において「わかった・できた」の経験を積むことができ、達成感を得られるようにすることができた。 ②学部研究において、教務班が研究推進班と連携し、年間指導の見直しに取り組むことができた。	①ねらいによっては、単語やイラストではわかりにくいねらいがある。改善策として工程をiPadで動画撮影して提示することにより、ねらいをより確認しやすくしていく。 ②総括連絡会が教務班会と連携し、横断的な議論を重ねることで、より実態に合った教育課程の編成につなげる必要がある。	○保護者アンケートの中で「わからない」が一番多かった。実際に見る機会が少なかったことが原因と思われる。 ●児童・生徒の「わかった・できた」の実感につながるような取り組みを、地域が少しでも手伝えればと考えている。 ●生活年齢に応じて、それぞれに目標や課題が設定されていると思うが、それが、「高すぎるハードル」「低すぎるハードル」になっていないか。「一人ひとりにフォーカスした教育」をお願いしたい。	①ICT機器の活用により、感覚ではなく、視覚的に確認しながら、評価をすることができるようになってきた。 オンライン授業の評価については、より良い評価方法を検討していく必要がある。 ②新学習指導要領についての理解は深まっている。研究を通して、ライフキャリア教育をより意識し、系統性のある年間指導計画を作成することができた。	①今後一層、ICT機器の活用を促進し、ねらいの明確化やわかりやすい評価方法について、教務班や研究推進班が推進役となって、研究、研修を進め、授業改善につなげる。 ②2年間の校内研究のまとめを受け、今後の方向性や取り組みについて検討し、カリキュラムマネジメントを行っていく。
2 (幼児・児童・)生徒指導・支援	○個々の障害特性を理解し、生活年齢や発達段階に合った指導・支援を行う。	①児童・生徒の実態を的確にとらえ、刺激の少ない物理的な環境設定の中で指導・支援を行う。 ②学校全体で人権感覚を磨き人権意識を高め子どもたちの人権に配慮した児童生徒指導・支援を行う。	①フロントゼロを意識した教室環境の整備を徹底する。 外部講師や専門職の助言をタイムリーに得られるシステムを確立し、アセスメントに基づく指導・支援を行う。 ②名札を常に着用し、誰に見られても説明できる指導・支援を行う。 「さん付け呼称」を行うことで、後に続く言葉遣いを優しくしていく。	①フロントゼロを意識した教室環境の整備を徹底し、刺激の少ない物理的な環境設定の中で、児童・生徒の指導・支援を行うことができたか。 ②人権に配慮した指導・支援ができたか。	①フロントゼロを意識した教室環境の整備は概ね達成できた。 アセスメントツールを活用しながら、個別教育計画を作成し授業実践することができた。 ②授業場面では「さん付け呼称」が浸透してきた。学校生活全般において、丁寧なことばかけがされるようになってきた。	①フロントゼロを意識した教室環境の整備を継続するとともに、聴覚刺激についても十分な配慮をしていく必要がある。日常の行動観察を含む各種アセスメントを的確に行い、専門職と連携しながら指導・支援を実践していく。 ②授業場面など設定された場面での「さん付け呼称」を継続しながら、学校生活全般において「さん付け呼称」と丁寧なことばかけができるよう実践を広げていく。	○保護者アンケートでは、実際の教育場面を見ていただく機会が少なかった関係で、「わからない」という回答が24%を占めた。 ●授業参観をした際、教室の環境設定において様々な工夫がしてあり評価できる。 ●アセスメントに基づき個々の目標を設定した成果が出ている。 ○学校は、人権に配慮した指導支援を行っているかという設問に対し、90%の方から、肯定的な評価をいただいた。 ○：保護者アンケート ●：評価部会委員より	①フロントゼロについては浸透してきている。環境設定については、専門職が生徒の個々の状態に応じた助言をタイムリーに行うことにより、すべての児童生徒が安全安心に学習活動できることにつながった。 ②児童・生徒への丁寧なことばかけが校内の様々な場所で聞かれ、個々の意識は高まりつつある。個々の取組を共有し、組織として人権感覚の向上につなげることが課題である。	①教室環境の整備だけではなく、学校全体の物理的な環境整備は、継続して行っていく必要がある。教務班が作成したチェックリストに基づき定期的な点検を行っていく。保護者に安心していただくために、工夫している点をホームページ等で発信していく。 ②個別の教育計画にもとづき、児童生徒の生活年齢と特性に応じた支援の手立てを丁寧に共有することにより、人権に配慮した児童生徒の支援・指導に生かせるようにしていく。

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月3日実施)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	○卒業後の生活をイメージし、小学部段階から系統性のある進路指導・支援を行う。	①好きなこと・得意なことを、授業や休憩時間の中で見つけ、一人で過ごせる時間を伸ばす支援を行う。 ②児童生徒の発達段階を踏まえて、ライフキャリア教育の視点を持った進路指導・支援を行う。	①「わかった・できた」につながる好きなこと・得意なことを担任と家庭が連携して探っていく。各学部と進路指導担当が中心となり、児童生徒の実態に合った余暇の過ごし方について検討し実践する。 ②昨年度の研究成果を活かしながら、小学部から高等部卒業までを見据えた系統的な進路指導・支援を行う。	①家庭と連携し休憩時間や余暇を安心して一人で過ごす方法をみつけることができたか。 ②児童生徒の発達段階を踏まえて、ライフキャリア教育の視点を持った進路指導・支援を行うことができたか。	①個々の生徒の好きなことや得意なことを見つけて、一人で過ごせる時間を延ばすことができた。 ②ライフキャリア教育の視点を持ち、小学部段階から身につけておきたいスキルについて指導・支援を行うことができた。	①休み時間に教員や友達と一緒に過ごすことが好きな生徒に対し、敢えて一人で過ごす時間を設定することは難しいが、意図的に設定していく必要がある。 ②コロナの影響で、小集団での指導・支援が増え、他者とコミュニケーションや協力が必要な課題設定が難しくなった。学習の進め方の工夫が必要である。	○学校は、家庭と連携した休憩時間や余暇を安心して過ごす方法を見つけたかという設問に対し、74%の保護者から肯定的な評価をいただいた。 ○学校は、将来の自立と社会参加に向けた進路指導・支援を行うことができたかという設問に対し、77%の保護者から肯定的な評価をいただいた。	①卒業後の生活をイメージし、休憩時間や余暇を一人で過ごす方法を見つけたかという設問に対し、74%の保護者から肯定的な評価をいただいた。 ②児童生徒の発達段階を踏まえて、日常の家庭での過ごしや地域生活を意識し、将来の自立と社会参加に向けた進路指導を行うことができた。	①今後も進路支援班で各学部の取り組み状況を把握し、学部のつながりを意識した進路指導・支援を行う中で、生徒の実態に合った余暇の過ごし方について、保護者とも連携し検討していく。 ②発達段階に応じて、自己選択、自己決定をする経験を重ね、役割を持って教育活動に参加することにより、進路指導・支援につなげていく。
4	地域等との協働	○共生社会の実現に向け、地域資源の活用、本校の資源の活用等を通し、双方に有益な取り組みを行う。	①パラスポーツ等を通して障害の有無を問わず自然に触れ合う経験をする中で、本校への理解や障害者理解啓発を推進する。 ②センター的機能の役割を果たし、インクルーシブ教育の理解啓発を進めるとともに、湘南台高校との連携を強める。	①コミュニティ・スクールの「切れ目ない支援部」主催の地域とともに創るパラスポーツイベントを開催し、障害者理解、啓発を進めることができたか。 ②多くの人に興味を持って閲覧してもらえる内容の充実したホームページを作り、情報発信の精度と頻度を高める。湘南台高校との連携においては、教育相談コーディネーター、進路担当、生徒指導担当等が定期的に話し合う機会を設け、持続可能な連携システムを構築する。	①「切れ目ない支援部会」主催のパラスポーツイベントを開催し、障害者理解、啓発を進めることができたか。 ②ホームページ更新の頻度は上がったか。湘南台高校との間で持続可能な連携システムを構築することはできたか。	①コロナの影響で「切れ目ない支援部会」主催のパラスポーツイベントは開催できなかった。 ②コロナの影響で、ホームページの月1回程度の更新は難しくなった。湘南台高校との連携は進まなかったが、地域の学校で、インクルーシブ教育理解啓発の出前授業を行った。	①次年度に向けて、持続可能な「地域とともに作るパラスポーツイベント」について委員の方とともに検討を重ねる必要がある。 ②ホームページの更新については、無理のない公開ペースとするために、検討が必要である。オンライン等、状況に応じて連携できるシステムを構築し、地域の学校のニーズや状況に必要がある。	●コロナの状況によっては、難しいと思われるが、今後も「地域に開かれた学校」「地域とともにある学校」づくりを目指してほしい。 ○学校は、ホームページ等を通じて必要な情報をわかりやすく発信しているか。また、学校の魅力をPRし、障害者理解、啓発を進めることができたかという設問に対し、保護者からの肯定的な評価は、62%にとどまった。	①実際にイベントの開催はできなかったが「できない」から「どうしたらできるか」という視点に切り替え、検討することができた。 ②コロナの影響で、見学ができないが、関心を寄せてくれている方々に対し、日々の最新の情報を発信していく必要がある。地域の学校にインクルーシブ教育理解啓発の情報発信を行った。状況に応じて協働した取組ができる仕組みを整えていく必要がある。	①コロナの状況に左右されない持続可能なパラスポーツイベントの企画・運営を行い、本校の児童生徒と地域の子どもたちとの交流の機会を持ち、障害者理解啓発を推進する。 ②日常の生活、登下校場面、余暇の過ごし方、さらには、教材教具、作品、教室環境など、閲覧者が知りたい情報を伝えるようにしていく。地域の学校との現状の連携を継続しながら、オンライン等持続可能な実施方法を整えていく。
5	学校管理 学校運営	○安全・安心な、事故・不祥事のない学校であるよう管理・運営を行う。	①私費会計の適正な執行や個人情報の適切な管理について徹底し、事故を未然に防ぐ。 ②自分で自分を守る行動がとれる子どもを育てると共に、危機管理能力を高め、組織として子どもを守る的確な判断ができるよう訓練する。	①「不祥事に対するハードルを下げない」を合言葉に、必要に応じた管理システムの見直しを行っていく。不祥事防止会議や教職員の綱紀保持の通知、啓発資料等を活用し、未然防止に努める。 ②訓練のための訓練ではなく、実際の災害を想定した「命を守る」行動をとる訓練を実施する。防災宿泊訓練については、目的を明確にし、コロナ対策を万全にして実施する。	①私費会計の適正な執行や個人情報の適切な管理について徹底し、事故や不祥事をゼロにすることができたか。 ②児童生徒一人ひとりが主体的に考え、様々なシチュエーションに対応できるようになったか。職員の危機管理能力が高まったか。	①私費会計の適正な執行や個人情報の適切な管理について徹底し、事故を未然に防ぐことができた。 ②避難訓練やシェイクアウト訓練を繰り返し実施することで主体的に考えて行動できるようになってきた。	①私費会計について県のマニュアルに則った適正な処理については、1年間かけて変更した。個人情報の適切な管理については、概ね達成できた。 ②防災宿泊については実施できなかったが、分教室において、段ボールベッド、防災食喫食等の体験的な防災教育学習を行うことができた。生徒は主体的に取り組むことができた。	○学校は、個人情報の管理を徹底し、安全安心で事故のない学校の管理・運営を行っているかという設問に対し、保護者からの肯定的な評価は89%と高かった。 ●防災食の喫食訓練は、食べるという経験にとどまらず、防災食の吟味、品目や素材の変更につなげられたかという指摘があった。	①「不祥事に対するハードルを下げない」を合言葉に、不祥事ゼロプログラムを実施し、不祥事防止会議、不祥事防止研修会を開催し不祥事の未然防止に努めた。 ②防災教育学習では、赤十字社や防災士を招き、実践的な学習を行った。生徒自身が災害時にできることを「自助」「共助」の観点から考える機会とすることができた。	①風通しの良い職場づくりに効果があった「同僚性を高めるグループミーティング」を来年度も実施し、事故の未然防止に努める。同僚性の中で、何でも相談できる雰囲気を作り、公務外の非違行為を未然に防止する。 ②災害時に自分がどう行動取るべきかを、主体的に考えさせる実践的な訓練を実施する。